

## 第 5 章

### 単位としての世帯と家族的つながりに関する覚書： エジプトの「家族・親族」を捉える諸側面

岡戸 真幸

#### 要約

本稿では、エジプトの家族について、個人を基点に、いくつかの併存する視点から考えていく。まず、エジプトの政策のなかで家族がいかに考えられてきたかを、オスマン帝国領から独立を目指した 19 世紀以降のエジプトの政策に焦点を当てたいくつかの文献を元に明らかにする。世帯が国家により独立した単位として注目されるようになる過程を整理する。次に、中東を事例とした人類学で従来言及されてきた家族の特徴について、説明する。父系出自集団や父方平行イトコ婚の分析は、現地調査を経てまとめられてきたものであるが、人類学では常に世帯を超えたつながりに注目してきたと考えられる。その後、筆者が現地調査で行ってきたアレクサンドリアの地方出身者を事例として、出稼ぎ労働者の社会的ネットワークと、都市にある同郷者団体における地縁の再生産を具体的な事例として検討し、家族的つながりについて説明していく。最後に、エジプトの家族を考えるうえで、検討すべき課題は何かを述べる。

**キーワード:**エジプト、家族・親族、出稼ぎ労働者、同郷者団体、社会的ネットワーク

#### はじめに

家族を考える際、古典的な概念ではあるが、個人を基準に自身の父母を基本とする家族 (*family of orientation*、定位家族) と、自身が父または母となる家族 (*family of procreation*、生殖家族) という分け方は、一つの指標として現在も有効であるだろう。個人は成長とともに、自身が育ってきた家族だけでなく、新たに自身が育てる側としての家族を作る可能性を持つのであるが、自身の人生の過程でできた父や母あるいは、兄弟姉妹との関係は、世帯を超えて維持されるのである。エジプトでは、アーイラ (*‘ā’ila*) とウスラ (*usra*) と呼ばれる家族概念によって、世帯の範囲とその外側に広がる家族の関係は、考えられてきた。ウスラは世帯を主に指す一方で、アーイラは父系によって整理され、

数世代にわたる多くの者と関係を構築する可能性を持ってきた。アーイラは、いくつものウストラを包含して形成される。この2つの家族概念の境界は、明確に分けられてはおらず、個人の捉え方に依存している。

本稿では、エジプトの家族について、個人を捉える背景として併存するいくつかの視点から考えていく。まず、エジプトの政策のなかで家族がいかに考えられてきたかを、19世紀以降のエジプトの政策に焦点を当てたいいくつかの文献を元に明らかにする。この節では、世帯が国家により独立した単位として注目されるようになる過程を整理する。次に、中東を事例とした人類学で従来言及されてきた家族の特徴について、説明する。この節で取り上げる分析は、現地調査を経てまとめられてきたものであるが、人類学では常に世帯を超えたつながりに注目してきたと考えられる。その後、筆者が現地調査で行ってきたアレクサンドリアの地方出身者を事例として具体的な事例の検討を行っていく。人類学で見られる家族的つながりが事例において、どのように使われているか、また、その先に地縁へと拡大する可能性に触れる。最後に、エジプトの家族を考えるうえで、検討すべき課題は何かを述べる。

## I 19世紀以降の政策上の家族：世帯内での教育、国民の育成

エジプトにおいて、世帯を独立した家族の単位として強調するようになった背景には、国民国家形成との関わりがあると考えられる。19世紀にオスマン帝国領だったエジプトでは、ムハンマド・アリーが総督として赴任して以降、近代国家として独立を目指してきた。しかし、1886年にスエズ運河が開通して以降、経済状況が悪化した結果、イギリスの介入を招き、1881年のオラービー革命を経て、その鎮圧を理由にイギリスに占領されることになる。エジプトの19世紀以降の国民国家形成を扱ったリサ・ポラードは、イギリス占領以降、公的領域での大半の決定権をイギリス植民地政府が占めたため、エジプトの知識人層は、植民地支配を脱するための改革の方向をまず私的領域としての家庭に向けたと述べている (Pollard 2005: 4)。国家としての意識を醸成させる過程で、家族は、この時代に国家との関係で考えられるようになってきた。

ポラードは、19世紀の思想家カーシム・アミンをエジプトの国家形成事業の産物であると述べている (Pollard 2005: 153)。アミンは、ムハンマド・アリーが始めた海外への留学生派遣事業により、1881年にパリへ赴き、その留学時の体験により、ヨーロッパに並ぶようなエジプトの近代化を唱えるようになった。彼は『女性の解放』(1899年)とその反響に対し応えた『新しい女性』(1900年)の中で、家庭に注目し、ヨーロッパ的な家族を比較の対象にして、預言者時代のイスラームには既にあったとされる男女の平等を反映した家族のあり方を模索した (Amin 2000: 115-118)。アミンは、アーイラのような父系出自で構成される家族のあり方よりも、単婚の奨励や離婚の反対など婚姻形態から家族を考え、夫と妻を強調したより小規模な家族を想定した議論を進めた。

アミンは、エジプトの近代化において、家庭を近代的な国民を育てる場と認識し、その場で子どもの教育に携わる主体として女性に焦点を当てた。彼は、子どもの教育は女性が担うものであり、そのため女性の教育の必要性を訴えた。また、家族は、国家の基盤であり、家庭内で良い教育を受けた者は良き国民になると、両者を結びつけて考えた (Amin 2000: 71-72)。女性はこの流れの出発点に位置し、女性が劣った位置にいたままでは、国家が発展しないと主張した。国民の教育の観点から、世帯としての家庭は、そこで何が行われているかに関心が集まることによって、家族から独立した空間として捉えられるようになったのである。

ポラードは、アミンが女性の解放そのものよりも、彼女の世帯や家庭内での夫や子どもとの関係を提示することに目的があり、女性の解放をエジプトの政治的、近代的能力の説明の手段として、さらに近代的で独立した諸国家の間でエジプトの立場を確保する手段として用いた、と分析している (Pollard 2005: 154)。確かに、アミンは、女性の側に立って解放を主張するというよりも、家庭内での女性隔離の解消と男女間の相互理解に関心があり、女性の教育も彼女自身の自立のためというよりは、夫と子どもをより良い国民に育てるためといった意味合いがあった (Amin 2000: 60-61)。教育を受け、知識を持った女性は、国家の発展のために男性を育てることが求められ、女性の社会参加は求められていなかった (Pollard 2005: 161)。

エジプトは第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期の 1922 年にイギリスからエジプト王国として独立するが、オムニア・エル・シャクリーは、この戦間期を経て、1952 年のエジプト革命からナセル大統領の任期 (1956 年～1970 年) までを、同国が社会を形成する一つのまとまりとして捉えた (El-Shakry 2007: 230, n83)。シャクリーは、エジプト社会が実体として形成されたのが戦間期であると主張し、さらに近代的な用語として「社会 (*mujtama'*)」というアラビア語が一般的に使用されるようになったのは 1930 年代以降であると述べている (El-Shakry 2007: 8)。1930 年代以降、社会福祉計画が政府によって行われてきたが、その計画は、ナセル大統領により社会主義に基づいた政策へと引き継がれた (El-Shakry 2007: 206-207)。

国民の質をいかに向上させるかが近代的な国民国家において焦点となる過程では、家族はその実践的な場としてみなされるだけでなく、国家にとって管理の手段としても見られるようになった。1930 年代には、国の人口問題が取り上げられ、家族成員の適切な数に関して議論が起こるようになった (El-Shakry 2007: 156-158)。公的討論の場としての家族は、私的領域と公的領域を結びつける要となったのである。一連の議論の中で、近代的な家族の創出は、自制し、自己管理できるような新しい性質を持つ国民を育てることになると考えられた (El-Shakry 2007: 166-167)。

国民育成の具体的な対象となったのは、女性と農民であり、家族は、その両者に関わる場とされた。農民は、1906 年にディンシャワーイ村で起こった鳩狩りに来たイギリ

ス人将校と鳩を生活の糧とする村民との間での衝突事件で、イギリス側に死傷者が出たことで、イギリスとエジプトの知識人層に衝撃を与え、国家の脅威とみなされるようになった。農民は 1919 年革命の推進力になったが、革命を主導したワフド党が、彼らが望んだ階級構造の変化を進めることはなかった。1922 年にエジプトはエジプト王国として独立するが、当時の政治家たちは、むしろ、農民の政治的勢力をそぐ形で、彼らの教育と合わせて、農地改革を行い、国家の発展へとつなげていく思惑を持っていた (El-Shakry 2007: 92-95)。改革において注目されたのは、農民の生活習慣と衛生概念であり、後進的とみなされた農村の改革が実行されたのである。

なかでも、エジプトで何度か試みられてきた模範的な農村の建設は、「新しいエジプト人」として農民をより管理しやすいように農村を再構築する試みであった。ナセル期に行われた同様の試みは、砂漠地などの開拓を目的にしたタハリール計画と呼ばれる小規模な家族を対象にした移住政策として、健康で教養のある新しい農民の創出を目指した (El-Shakry 2007: 208-211)。この新しい農村は、移住希望者を 5 人以下の家族成員を持つ者を基準にしたことから、血縁と地縁から切り離し、社会主義政策に基づき、女性を対等な労働者とみなす共同体を作ろうとした試みだとみられる。

農村改革は、人口政策とも一致し、いかに増大する人口を捉えていくかといった文脈で引き続き焦点となった。女性は、子の教育や健康の管理面で重要な役割を果たすとみなされた。家族は、より多く産むよりも、より良い将来の国民となる子どもを産むように奨励され、小規模で衛生的な状態が、近代的であると考えられた。統計はこうした家族を数値として把握する手段であった。

人口研究は、1950 年代まで科学的な手法が確立しなかったが、それ以降、近代的な家族概念と近代の新しい習慣の基盤となった (El-Shakry 2007: 192-193)<sup>1</sup>。1969 年から 1970 年にかけてメヌフイーヤ県で統計調査を行ったサード・M・ガドアッラーは、対象となった農村での家族について、現地語表記がないが、世帯 (*household*) を基準に、核家族 (*The nuclear family*)、拡大家族 (*The extended family*)、合同家族 (*The joint family*)、複合家族 (*The compound family*) の 4 つに家族を区分している (Gadalla 1978: 68)。このうち、拡大家族は、両親が結婚した子どもと共に暮らす形態であり、合同家族は、父親が亡くなった後に一つの世帯で兄弟がそれぞれ結婚して共に生活する形態であり、複合家族は、拡大家族と合同家族を合わせた形として、両親と複数の結婚した兄弟が同居する形態を指す。

---

<sup>1</sup> エジプトにおける家族計画については、別稿でまとめた (岡戸 2018: 54-55)。要約すると、ナセル期の人口政策は、当初人口増が国家の力になると考えられたため、人口抑制に向かわなかったが、やがて高まる人口圧力により、出生率の抑制に向かった。サダト大統領の任期 (1970 年～1981 年) になると、家族計画はより推進されていった。また、サダト政権は、小規模な家族形態を目指し、アーイラのような家長が家族成員を管理統制するような家父長制の解体を目指した。

ガドアッラーは、世帯という枠の中で核家族以外の家族形態を子どもが結婚した時に親と同居を継続するために成立する過渡的な形態と捉えている。子どもが経済的に独立し、別の世帯を形成すると、拡大家族は解体すると述べている (Gadalla 1978: 71)。家族形態は、農業などの家内産業で収入が得られるかどうかで変わり、世帯の外に収入源がある場合、特に若い世代では独立した世帯を持つ傾向にあるという。ガドアッラーの分類では、世帯が分かれた者同士を統計上で一つの家族とみなさないが、世帯が一つであれば、上記のように、様々な形態の家族が存在するのである。

一方で、彼は、世帯の外の関係を父系出自でたどれる親族集団 (*kinship groups*) としている。親族は、安全や援助、地位、承認、特権の面で個人や家族が頼ってきたが、生活環境の変化や夫婦と子どもが都市に単独で住むことで、崩壊しつつあると述べている (Gadalla 1978: 47)。経済的な独立や物理的に離れた場所で暮らすなど、表面上は解体したように見えるが、いかに個人の認識が変化したかや、ここで挙げられている親族が果たしてきた役割を代替える機能が現れたかについては、ガドアッラーの関心と離れているためか、言及がない。

19世紀以降、政策上の家族は、世帯に基づいて把握されてきた。現在も、行政における家族は世帯を基準に考えられている。ただし、家族の関係性を世帯で区切る方法は、統計の便宜上は有効であるかもしれないが、世帯の外側にある関係が分析の対象として考慮されず、家族が有する人間関係の全体を捉え損ねているのではないだろうか。その点を、次に家族の関係性に焦点を当ててきた人類学を中心とした業績を見ていくなかで考えていく。

## II 中東及びエジプトの家族・親族に関する人類学的分析から

本節では、家族における世帯を超えた関係の構築について、いくつかの異なる側面から検討する。デーブル・F・アイケルマンは、『中東と中央アジア—人類学的手法』の中で、親族や、家族関係、他の関連する文化概念は、保護-被保護関係や隣人関係、友人関係といった相補的で地域的な諸概念の文脈と、経済的で政治的な文脈において研究されるべきであると述べている。また、人類学者が使う親族用語は、自らの経験に遠い概念 (*experience-distant concept*) と捉えるべきであり、中東の他のいくつかの地域で見られる概念の比較から理解すべきであるとしている (Eickelman 2002: 140, 144)。家族・親族を自らの経験に近い概念として家族の延長にある血縁関係を意味するものと理解してしまうと、中東における家族・親族関係は理解できないのである。

アイケルマンは、家族・親族を含めた社会的なアイデンティティーをいかに説明し、記述するかについて、ヒルドレッド・ギアツのモロッコでの事例を挙げている。ギアツは、家族成員間の関係について、セフルー市の富裕な一族の成員間関係を調べた。彼女は、お互いがどのような家族・親族関係にあるか把握するために、人類学者が思い浮

かべるような構造化され、階層分けされた系図を描こうとするが、思い通りにいかなかった (Geertz 1979: 350)。結果として、数人の男性成員を基点とした正確な系図が辿れない人々の集団が確認できただけだった。その理由として、ギアツは、調査対象の一族に属する者たちが、生物学的な系譜によってその関係を整理し、説明することになじみがなかったからだと述べている。

ここで考えられている父系とは、単なる系譜概念ではなく、保護-被保護関係を含む帰属を表していたのである。ギアツは、モロッコ人の父系を同じくする者たちや、婚姻関係などを含み、ある人物を中心にまとめた集団を「名前集団 (*name cluster*)」と呼び、父系出自集団と区別した (Geertz 1979: 351-352)。エジプトで使われるアーイラは、父系出自集団とされるが、その系譜に連なる全ての男性に始祖となる可能性がある。子孫から見て、どの男性を始祖と取り、自身の帰属するアーイラとするかは、可変であり、それにより、アーイラとする規模も異なるのである。ギアツが「名前集団」と呼んだ概念は、人々の認識を基準とした集団形成の考え方であり、エジプトでも十分適用できるだろう。

エジプトを始めとした中東は父系出自社会といわれるが、中東で広くみられる父方オジの娘を結婚相手にする父方平行イトコ婚により、下エジプトの人々は父方と母方の親族を分けて考えるよりも、両者をともに親族と考えるようである (大塚 1983: 565)。また、父方平行イトコ婚は、核家族を外婚単位として親族内婚をとる点に特徴があり、1人の人間が男系親族であり、姻族であり、母方親族といったいくつかの社会的カテゴリーを兼ねることもあり得る (大塚 1983: 575)<sup>2</sup>。父方平行イトコ婚において、この3つのカテゴリーは、全て同じアーイラ成員を指すものとなり、各カテゴリーを分けて考える必要性はほとんどなくなる。

一方で、全ての婚姻関係が父方平行イトコ婚で行われるわけではないので、例えば異なるアーイラ間で結婚する場合、これらのカテゴリーが分かれる者も存在する。ここに、疑似的親族の用法により、遠い関係性にある者 (姻族) を、近い関係性 (親族) に言い換える余地が出るのである。エジプトでは実際には、遠い関係にある者を、近い関係にある者とみなす用法が存在する (大塚 1983: 583)<sup>3</sup>。重要であるのは、系譜を正確にたどることではなく、相手をどのようなカテゴリーにあてはめて理解するかであると考えられる。

---

<sup>2</sup> 例えば、父方平行イトコ婚として、自身の父の兄弟の娘を妻にした男性にとって、妻の父は、父方オジであるが同時に姻族である。また、彼らの子どもにとって、母方祖父 (前出の「妻の父」) は、同時に男系親族でもある。

<sup>3</sup> エジプトでは、父方オジを指す「アンム (*amm*)」とは、それ以外の男性を指す際にも使われ、筆者も「アンム」と呼ばれることもある。また、筆者に年の近い調査対象者は、筆者を「兄弟」として、父親と同年齢の男性は「息子」として、筆者を呼んだり、人に紹介したりする。

中東における一連の家族・親族論は、父系出自社会の影響で、男性に注目し、女性のつながりについて十分な考察を行ってこなかった。女性の側から考えると、例えば、男性は父系社会のため、一つのアーイラにしか所属できないが、女性は、他のアーイラに婚出することで、娘としてのアーイラと母としてのアーイラが別になる場合がある。すなわち、女性は、自らの父につながる形で娘としてのアーイラの一員であり続け、自らの子によって母として婚入したアーイラの一員になれる可能性を持てるのである。

家族における父系の概念の他に、シラトラヒム (*ṣilat r-raḥim*) または「子宮のつながり」という言葉<sup>4</sup>も、家族成員間の絆の説明として存在する。シラトラヒムは、クルアーンや預言者の言行録であるハディースにも登場する概念である。この関係で理解される者たちは、1人の母を基準にその母の子宮につながりを持つ者たちを包含する。

父系で構成されるアーイラと、父方と母方の両方をたどる可能性を持って選系と考えられるシラトラヒムで結びつく者たちの違いは、女性の子どもが前者では含まれない(別のアーイラ成員になる)のに対して、後者では含まれる点にある。アーイラ概念だけだと、女性の子どもは別のアーイラに属する成員となるが、シラトラヒムの概念は、女性の子どもと男性の子ども同士が彼らの両親同士が母親を同じくする者であるという結びつきにより、父系社会の中でお互いの関係性を認識する契機になる。この関係は、さらに世代を遡っても考えられる。

アーイラはイスラーム以前から存在した部族的な概念に由来し、シラトラヒムはイスラーム以降に普及した信徒同士の絆にも使われる概念であり、両者は別の考えであるが、筆者が調査地で聞いた限りでは、両者は併存しているようにみられる。ただし、アーイラについては、語られる機会が多いのに対して、シラトラヒムは聞かれれば答えられる者が多いという違いはある。

また、シラトラヒムは、自身と母方オジやオバとの関係が、別のアーイラであるにもかかわらず、保たれている理由を説明する材料にもなるだろう。他にも、自身と姉妹の子どもや父方オジの娘の子どもなど、アーイラ成員にならない人たちの関係を、父系以外の親族として捉えられる背景には、シラトラヒムの概念との関わりがあるだろう。家族成員間の関係は父系以外の関係性の余地を持っており、質の異なる様々な関係が、重層的に絡まり、エジプト人同士の家族・親族関係を構築している。女性の側からアーイラを分析する試みには、さらなる検討の余地がある。

次節では、筆者の調査事例から、人類学で議論されてきたアーイラがどのように現在

---

<sup>4</sup> 似た言葉として集団を指すシッラ (*shillat*) がある。ロバート・スプリングボーグはカイロに実在した政治家であるサイド・マレイをとりあげ、彼の一族の家系と婚姻関係や交友関係を調べ、彼がナセルとサダト両大統領の政治的変革期を乗り越えて活躍した姿を描いたが、シッラは、様々な機会に出会う友人・知人関係により形成され、お互いの政治的成功などを助けるために利用された (Springborg 1982: 100)。

の社会で人々に認識されているか、また、そのつながりがいかに発展していくかについてみていく。

### Ⅲ アレクサンドリアの地方出身者における家族的つながり

本節では、筆者が、エジプト第2の都市で地中海に面したアレクサンドリアでこれまで行ってきた人類学に基づく現地調査の事例を提示する。まず、上エジプト（ナイル川の上流であるエジプト南部）のソハーグ県出身の出稼ぎ労働者が出身地で培ってきたアーイラを含む社会的ネットワークを用い、いかに都市で仕事を獲得するか的事例を扱う。次に、都市生まれであるが地方に出自を持つ同じソハーグ県出身者を対象にして、彼らによって組織された相互扶助団体である同郷者団体によって作られる地縁を基盤にしたつながりの再生産の事例を提示する。両者を元に、世帯を超えた関係性について考察していく。

アレクサンドリアの庶民街には出稼ぎ労働者が多く集まる通りがあり、その通りにあるいくつかの庶民的喫茶店（アホワ）にいる出稼ぎ労働者を対象に、筆者は主に 2005 年から 2006 年にかけて調査を行った（岡戸 2008; 2012）。調査の結果、一つのアホワにいる出稼ぎ労働者の大半は、ソハーグ県の A 村かその周辺村出身であることが解った。彼らは、建設現場で生コンクリートの流し込み作業に従事する出稼ぎ労働者であり、その現場で働く労働者と現場監督はお互いに A 村出身か現場監督と同じアーイラであるといった関係が存在した。アホワは、労働者にとって、翌日の仕事が同郷の現場監督から差配されるなど、仕事の情報交換のために、また、同郷の者との交流などの社交のためにも利用されていた。

調査対象としたアホワ I では、調査期間中に約 70 人以上の労働者と、彼らが都市で働いている期間、主に仕事が終わった後の夜間に会った。大半の労働者は、A 村の 3 つのアーイラのどれかに属するか、母方を通じた親族関係にあるかだった。そのうち、37 人は、N アーイラに属していた（岡戸 2008: 55）。N アーイラは、6 代前の 1 人の男性を共通の始祖とし、その男性の 3 人の息子のうちの 1 人の子孫たちは主にアレクサンドリアで労働者として働いている。他の 2 人の息子の子孫たちは、アレクサンドリアで働く者もいるが、カイロで同様の建築労働者として働く者もいる。アレクサンドリアで働く者は、単身出稼ぎ労働者であり、妻と子どもを出身地に残しているため、定期的に帰郷している。

出稼ぎ労働者の仕事において、N アーイラにいる 4 人の現場監督が出稼ぎ労働者に仕事を差配しており、出稼ぎ労働者は、都市での日雇労働の大半を現場監督から得ている。他にも、アホワ I にいる同郷の他の現場監督からも仕事を得るが、彼らが、自身のアーイラか同郷以外の関係から仕事を得ることはない。仕事の獲得における現場監督と出稼ぎ労働者の関係は、アーイラだけで成り立つわけではなく、母方親族、出身村にお



ける近隣関係などいくつかの関係が見られた(岡戸 2008: 58)。出稼ぎ労働者が都市での働く先を決めるにあたっては、こうした社会的ネットワークが確保されているかが重要な指標となっている。

出稼ぎ労働の調査対象者は、農村から都市への一時的な移動であり、都市へ定住する者は少なかった。一方、都市には、就学や他の様々な職を求めて来る者たちがおり、その中には定住する者たちもおり、彼らが都市で形成する社会的ネットワークのあり方を都市にある同郷者団体を対象にして考察した。都市には、政府の手が行き届かない様々な社会福祉分野を、住民が自主的にお互いに助け合う形で行うための団体が数多く存在し、同郷者団体もその中の一つとして、都市に在住する同郷者の援助や社交を目的に、出身村単位やその地域に住む同じ県の出身者同士を単位として、設立されている。

同郷者団体の会員は、都市に移住後も、出身地との関係を様々な形で維持し続ける者たちで構成されているが、調査結果から大半が都市生まれであることが解った。団体が基準とする地縁は、父親の出身地の地縁を指し、都市で彼らが現在暮らす場所で作られる地縁とは別のものである。このように地縁を二つに分けて考えたが、地縁と血縁について、拙稿では、「地縁は各人の生活に合わせて、現在を基点として作られ、可変すると考えられるが、それに対して、血縁は、自身の家族を中心に作られる人間関係であり、疎遠になることはあっても、可変しない関係である」と定義した(岡戸 2015: 31)。可変しない関係である血縁に対して、可変する関係である地縁が、都市で地方に出自を持つ者に、他者とのより広い関係性を構築させる余地を持たせていると考えられる。

血縁から地縁への広がりや、出稼ぎ労働者の社会的ネットワークでも見られた。彼らのネットワークは、アイラを中心とした血縁関係で組織され、さらに、母方や同村や隣村出身者が加わり形成されていた。血縁と地縁は、別の関係性であるが、農村での彼らの居住範囲の近さや、村民同士の婚姻関係の積み重ねによりお互いが関係を持っているなどの理由で、連帯感の形成に影響を与えていた。

同郷者団体は地縁によって成り立つ組織であるが、調査に協力した団体役員は、県全体は系譜をたどると一つの氏族で成り立っており、本部支部制を採用するアレクサンドリアでは、団体本部を母体として、支部をその子、つまり成員とみなす、と家族用語によって団体組織を説明していた(岡戸 2015: 36)。アイラの役割として成員間の相互扶助が挙げられるが、同郷者団体は、相互扶助を通して会員間の結びつきを強めることを目的としている。都市におけるアイラの代わりとしての役割を団体は果たし得ると考えられる。

都市生まれの者にとって、父親と同じ出身地の者との関係を、団体を介して保つ理由は、都市にいる多くの者の中から「同郷」という共通項を持つ者とのつながりを得るためと考えられる。都市において、自身に近い者を多く知ることは、自身が都市生活で問題を抱えた時に解決方法を得る際、誰が適切であるかを知る手段になり得るのである

(岡戸 2015: 54)。また、団体の存在は、都市において自身が誰であるかを常に確認する機会にもなり、上エジプト出身者が持つとされる客人に対する寛大さや仲間への団結心などの意識を定期的に会員間で共有させるのである。

同郷者団体が基盤とする地縁は、現在の生活する場とは異なる場所に求められている。その地縁は、会員間の認識に依存している。都市生まれの会員が団体加入の動機として語る「郷土愛」や「(出身地との) 結びつき」といった言葉は、地縁が実際の経験に基づくものよりも広い関係を捉えたつながりのあり方であると想起させる (岡戸 2015: 53)。

エジプトでは、1960年代より導入された家族計画の浸透により、女性1人当たりが生涯に産む子どもの数である合計特殊出生率が下がっており、家族規模が縮小傾向にある。アーイラとしての家族的つながりへの影響も予想される中で、同郷者団体の存在は、地縁を拡大したつながりの再生産にもなり得るのである (岡戸 2015: 32)。また、世帯としての家族が確立していく中で、新たな関係性の模索として、自身の出自に由来する地縁の活用は、都市生活における有効な手段になる。

また、出稼ぎ労働者の社会的ネットワークには、アホワという場所の存在、アホワIと他の同様の出稼ぎ労働者が集うアホワとの間で労働者が行きかうことで作られる空間の存在も考慮できる (岡戸 2012: 41-42)。人々の交流が担保される場所や空間があることが、つながりの維持に貢献するからである。同郷者団体は、都市にいる同郷の者を知る機会の提供が主であるが、都市のどこに自身の同郷者がいるか知り、相互訪問などを通して、活動範囲を広げることで、自身を他者との関係で都市に位置づけられるのである。社会的ネットワークと場所や空間の問題は、稿を改めて論じていきたい。

## おわりに

エジプトの家族・親族は、個人を基準として、夫婦や親子、父方あるいは母方オジ・オバやイトコのようにその関係性が世帯の枠を超えて広げられる点に特徴がある。エジプトの政策では家族を国民の管理という視点から世帯を基準にしたが、人類学では個人を対象にし、彼らの認識の拡大に焦点を当てた。子どもの数の変化や住居問題などの政治経済的状況と、人々が持つ他者への認識の両者は、現実の家族・親族関係を形作っていく要素である。筆者が調査した出稼ぎ労働者の出身村では、建物の屋上に柱用の鉄骨が伸びており、息子が結婚すると新しく柱と壁を作り、新居を作る事例が見られた。都市部でも、各階にある住居の全てが同じアーイラ成員で占められている建物がある (岡戸 2018: 75)。彼らの意識の中で、これは、どれだけ別の世帯と認識されるのだろうか。

エジプトの家族・親族を捉える視点として、現実の家族がいかに自身の周辺にある人間関係を捉えていくかについては、引き続き検討の余地があるだろう。また、家族に関する認識は、個々人が何を誰に求めるかという状況にも左右される。世帯からその外側

に広がる血縁とさらに様々な地縁としての関係を家族的つながりとして捉える試みは、今後さらなる事例と共に考察を重ねていかねばならない。

#### <参考文献>

- 大塚和夫 1983. 「下エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書」『国立民族学博物館研究報告』8(3) 563-586.
- 岡戸真幸 2008. 「アレクサンドリアの上エジプト出身建築労働者による社会的ネットワーク形成—拠点としてのアホワ（伝統的喫茶店）を中心にして—」『日本中東学会年報』24(1): 45-73.
- 2012. 『エジプト都市部における出稼ぎ労働者の社会的ネットワークと場をめぐる生活誌』上智大学アジア文化研究所 Monograph Series, 上智大学アジア文化研究所。
- 2015. 「エジプト都市部で同郷者団体が果たす役割と意義—アレクサンドリアのソハーグ県同郷者団体の事例から—」『日本中東学会年報』31(1): 29-62.
- 2018. 「男性役割から不妊と家族を考える—上エジプト出身者との出会いから—」村上薫編『不妊治療の時代の中東—家族をつくる、家族を生きる—』アジア経済研究所、51-80。
- Amin, Qasim 2000. *The Liberation of Women and The New Women: The Documents in the History of Egyptian Feminism*, trans by Samiha Shidhom Peterson, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Eickelman, Dale F., 2002. *The Middle East and Central Asia: An Anthropological Approach*, Fourth Edition, Upper Saddle River: Prentice Hall.
- Gadalla, Saad M. 1978. *Is There Hope?: Fertility and Family Planning in a Rural Egyptian Community*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Geertz, Hildred 1979. "The Meaning of Family Ties," In *Meaning and order in Moroccan society: Three essays in cultural analysis*, Clifford Geertz, Hildred Geertz and Lawrence Rosen, pp. 315-391, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pollard, Lisa 2005. *Nurturing the Nation: The Family Politics of Modernizing, Colonizing, and Liberating Egypt*, Berkeley: University of California Press.
- El-Shakry, Omnia 2007. *The Great Social Laboratory: Subjects of Knowledge in Colonial and Postcolonial Egypt*, Stanford: Stanford University Press.
- Springborg, Robert 1982. *Family, Power, and Politics in Egypt: Sayed Bey Marei —His Clan, Clients, and Cohorts*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.